

対米輸出うんしゅうみかんの検疫条件緩和される

アメリカ合衆国は、わが国から輸出されるうんしゅうみかんに対してカンキツかいよう病の侵入を防止するため、特別な検疫条件を設定している(本誌23号参照)。これに対し、わが国は検疫条件の緩和を従来から要請してきたところ、昭和62年9月の輸出州の拡大(本誌24号参照)に引き続いて、昭和63年12月には、うんしゅうみかんの輸出ほ場の周囲に設置することが条件となっている幅400mの緩衝地区に、従来うんしゅうみかん以外のカンキツ属及びカラタチ属植物の栽植が認められていなかったが、かいよう病に抵抗性を有するオレンジひゅうが、きよみ、はっさく、ひゅうがなつ、ひらどぶんたん、ベトナムぶんたん、ポンカン、ゆず及びきんかん属(まめきんかんを除

く)の栽植が認められた。

このアメリカ合衆国の規則改正によって、対米輸出うんしゅうみかんの生産地域を設定することが困難であったみかん園も、今回の措置により新たに設定が可能となった。



白色の標札：無病地区
黄色の標札：緩衝地区

海外のニュース

米国におけるアルファルファタコゾウムシの生態型

1982年に福岡県と沖縄県で初めて発生が確認されたアルファルファタコゾウムシ *Hypera postica* (Gyllenhal) はその後分布を拡大し、ゲンゲを加害するようになっている(本誌12、15、16、26号参照)。本種はヨーロッパ原産で米国へは1904年ユタ州、1939年アリゾナ州、1951年メリーランド州へと3つの異なる生態型が侵入、定着した。現在では全米のみならずカナダ、メキシコにも分布を拡大し、北米の主要な牧草であるアルファルファに大きな被害を与えている。

これらはそれぞれ西部型、エジプト型、東部型と呼ばれており、生理・生態的に違いがあることが明らかにされているが、形態的には区別できない。これらのうちエジプト型は発見当初 *H. brunneipennis* と同定されていたが、近年、染色体の数が本種と同じ $2n=20+\lambda Yp$ であることや酵素型、核型分析などから *H. postica* とすることが妥当であるとされている。また、これら3系統の交配実験でエジプト型と東部型との組み合わせでは次世代が得られるのに対して、西部型の雄と他の2系統

の雌との組み合わせでは次世代が全く得られないこと、また、西部型の雌と他の2系統の雄との組み合わせで得られる次世代の雌の割合が極端に高くなることが明らかになっている。

西部系統と他の2系統との組み合わせで次世代ができないか、あるいは次世代の雌の割合が高くなる現象は西部系統に存在するリケッチア(*Wolbachia postica*)に起因することが明らかにされている。このリケッチアは本種の西ヨーロッパ産のいくつかの系統にも見出されており、これらと西部系統との交配では正常な次世代が得られる。これらの知見はわが国に侵入した本種の起源を探索するうえで重要な手掛りとなろう。*Hsiao T.H. & C. Hsiao(1985) Entomol. exp. appl. 37, 155-159

発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57(横浜農林水産合同庁舎) ☎045(211)2299

発行人 小畑 琢 志

編集責任者 長 尾 記 明

印刷所 保土ヶ谷印刷株式会社